

## “気象現象”という表現について

“気象現象”という言いまわしが、大へんくどい、押付けがましい表現であることを、私は再三のべつづけてきた。気象解説を専門とされる人の中には私見に賛同される方もいる。

気象用語の一つの標準となることが予想される新刊の『最新・気象の事典』(1993)においても、“気象現象”は乱発されている。そこでもう一度取上げることにした。すでに創造力を失った年寄りの冷水として、会員諸氏の一考をわずらわしたい。

はじめに私見を要約する。

1. 気象とは大気中の現象のことであり、すでに気象の中に現象がある以上、これにさらに現象をつけるのは重複した表現であり、“気象”だけで十分表現されていると思う。

2. 文章や話のリズムから、どうしても現象がつけなければ、“大気現象”とすれば、きわめてすっきりする。

“気象現象”の用例を『最新・気象の事典』から、4つほど拾ってみよう(下表参照)。

これらは、いずれもその表現から“現象”を削除しても何らさしつかえない。

上記事典において、“気象現象”の表現を使わず、“大気現象”を使った人がいる。それは“天気予報”(p 367-370)の項目を担当した足立崇である。足立はこの項目中の一章“予報の歴史”を“大気現象の予測は…”(p 367)で書き始めた。また“予報の方法”の章では(p 369)、“大気現象の観測から予報にいたる手順を図に示す。”とされた。

ところが大へん残念なことに予報の手順を示したそのフロー・タイアグラムにおいては“気象現象”が使われており、足立の気くばりが徹底していなかったことを示している。

だが本文中で足立が“大気現象”と書かれた部分は、評者のひいき目かもしれぬが、大へん明るく、すっきりとした感じがする。

ところで、大へん興味深いことは、テキスト等も沢山かかれ、教育者としても影響が大へん大きかった気象界の大先達・岡田武松博士が“気象現象”を乱発しているのである。

多くの人は、おそらく読んでいないと思うが、岡田博士は日本学士院(1964):明治前・日本物理化学史、中で“気象学”を担当された。私はこれが多分に藤原咲平(1951):日本気象学史を意識して書かれたものと思うのであるが、この第5章は“気象現象”であり、その書き出しの9行中に、実に4か所も“気象現象”が使われている。

用語については特にやかましかった岡田博士にして、このような表現をとられたことは全く驚きであるが、私は口癖とは全くおそろしいことだと思った。そして“気象現象”という表現に対し、反対しつづけている私自身、独善におちいつているのではないかと疑がったりした。

私の記憶は定かでないが、10年位昔のこと、私はある大学教授に“気象現象”という表現はおかしいと申しのべたことがあった。その時、私は教授から即座に“気象現象でなにがおかしいか!”とたしなめられた覚があるが、その教授が何を理由に反撃されたのか、その理由を思い出すことができない。

会員諸氏の中にも“気象現象”という表現をされる人は少くないと思う。テレビ・ラジオ等においても“気象現象”を次から次へと乱発する人があり、そのたびに私は聴きぐるしく思い、いつも不快になる。そのような人達からの“気象現象”弁護論がききたい。

(根本順吉)

ページ	項目	用 例	筆者名
27	宇宙気象学	大気が存在する星における気象現象	関口理郎
215	持 続 性	気象現象の空間・時間スケールに関連	朝倉 正
353	低 気 圧	気象現象は、時間や空間のスケールで分けられる。	中山 嵩
412	日本の気象	…実に多彩な気象現象がみられる。 これらの気象現象を科学的に認識するため…	松本 淳